

7 8号





南北米福地開発協会責任者会議
(1月23日川崎市市民プラザ)

『過去十年は困難な環境の中、不屈の精神で道を拓いて来ました。その結果、チャコ地方を超え、パラグアイの国の重鎮まで影響を与え、パンタナールの貴重な生態系の保存とそれを行ってきた南北米福地開発協会の奉仕活動とその精神が国の青年たちの教育のために必要であるとの評価を得て来ました。』

今日までの皆様の理解と内外の暖かい支援に心から感謝しております。

今後、現地南北米財団の歩みが継続し、その目的を全うして行くには現地の財団

が日本からの支援によるだけでなく、自立できる道の確立をなすことを計画しています。

特に自然保護に対する意識の向上を目指すエコツアー、環境を破壊しないモデル牧場を整備し、牛の飼育をなすことを計画しています。今後とも会員の皆様の暖かいご指導、ご鞭撻をお願いいたします。との柴沼事務局長からの報告を元に話し合いが持たれました。

今後の計画案(南北米日本支部での)

青年会員の勉強会(月一回)

吉本邦男氏担当

(ピースライフセミナー参加者、ならびに青年奉仕隊参加者を中心に)

レダ開発に従事する青年の発掘と世界の環境問題に関心と責任を持つ人材の養成

レダの産物を用いる製品の開発とマーケットの開拓(柴沼邦彦氏担当)

(特にニーム、モリンガによる)

パンタナール、エコツアー旅行のプロモーション

(岩澤春比古氏、森川道子氏担当)

環境牧場をレダに作るための日本側からの協力

(高橋昭三氏担当)

パラグアイの森林再生運動

(地球のみだりを守る会との協力強化)

国際協力青年奉仕隊の継続

レダ活動報告を通し奉仕文化と環境保護の啓蒙

中田所長、佐野南北米財団副会長、ブラジル訪問

(佐野氏報告)

今後の三年間あるいは十年の新しい出発をすべく中田先生がレダから出て来られ、パラグアイ及びブラジルを回りながら、新しい出発に対するヒントを掴むべく、日系人や研究者を訪ねて回るようになった。特にブラジルでは、兼ねてから中田先生が興味があったのはアマゾンの河口の近くの最大の日本人移住地であるトメアスの移住地でした。そこは、コシヨウの生産で一躍名をはせた所であり、その後もアグロフォレスト耕作を始めた所でもあり、また大東浩氏の本などによれば、早くからニームの植林もなされ、ニームに対しても様々の実験、研究がなされている所とのことでもあった。

【トメアスでの体験】(一月一八日サンパウロ着、一九日ベレン、二十一日トメアス)

ブラジルはさすがに広大な国でサンパウロからベレンまでは三千キロあり、最初は経費削減の折、バスで行く予定だったのですが、バスでは五十時間強ということに加え、バス賃も片道二百ドル強で飛行機とあまり変わらないことが分かり、結局飛行機を利用することになった。

トメアスまでは二百キロ強の距離だが、バスで数時間かかるとは聞いていた。すぐにタクシーでベレンのバスターミナルに行った。そこでトメアス行きバスを探したら、すぐに出るバスがあるということ。そのバスに飛び乗った。バスに乗るなり、いきなり雨が降り出した。レダなどとは違い、予告なしにいきなり雨が降るのには驚いた。さすが熱帯雨林気候だ。バスは窓もきっちり閉まらないおんぼろバス。道は舗装されてはいるけれど密林の中をひた走り、なぜか常にがたがたゆれた。開拓者の苦勞が偲ばれた。二時間ばかり走ると、大きな川に出た。二百メートルぐらいの川幅をフェリーで渡るらしい。六時出発ということで一時間近く待たされた。ようやくトメアスに着いたのが夜の九時ごろとなった。

ともかくホテルを探して一泊しようとして、たまたま道を尋ねた日系の人が車でホテルまで案内してくれた。日系人は何処に行っても非常に親切で、日本の古き良き伝統が残っているようだ。

次の日の朝、紹介されていた海谷（かいや）英雄文化協会会長に電話すると、すぐ快く九時に協会の事務所で会いましょうと言ってくれた。待っていてくれたようである。文化協会には昨日の日系の人が車で連れて行ってくれた。

海谷会長は七〇ぐらいの年配の人であった。一九六二年に二〇才で移住してきたそうである。

トメアスの歴史及び現状を簡単に説明してくれた。一九二九年に第一次の人がここに入植。最初は、野菜や果物を育てて、何日もかかってベレンまで売りに行っていたらしい。その後、一九四〇年代になってコショウの栽培に成功。

一九五〇年代にコショウの価値が高騰し、コショウ景気に沸いたようである。当時、コショウ御殿といわれた豪邸があちこちに建てられたらしい。お金が金庫に入りきれなくて、農協の机の上に札束が山積みされていたとか。

それが、一九七〇年代に入ると、根腐れ病が出てコショウが枯れ始め、JACAの研究所も共に対策を模索するも有効な解決策が得られず、借金を抱えた多くの人がトメアスを離れていったという。残った人たちが、単一栽培が自然に反しているとしてアグロフォレストの方法で色々な果実を栽培するようになり、一九八〇年代後半にはJACAの資金提供も受けて、果汁工場を建設。それが、成功してその工場を拡張しながら、今日に至っているという。

現在は、アサイ、カカオ、アセロラ、クプアス、マラクジャ、グラビオラなど数多くのアマゾン独特の豊富なフルーツの果汁を抽出してブラジル各地に送り出し、また日本や世界にも輸出しているそうである。

我々もここに来た目的を手短に説明。チャコ地方及びパンタナールの紹介、レダの土地及び気候の状況。その地でなしてきた現在までの色々な農業実験。そして現在ニームに対して大きな期待を持っていること。それ故、ニームにおいてのトメアスの経験を学びたいこと。又アグロフォレスト耕作を勉強したいこと、など。会長はすぐに、農協の理事でブラジルや日本の各所でアグロフォレストなどの講演をしている小長野（コナガノ）道則氏に事務所に来るように連絡をつけてくれた。また大東先生がトメアスで三年間、ニーム植え付けを奨励していた時の農協の理事長をしていた南部氏とも連絡を取りすぐに事務所に来るように手配をしてくれた。そして、間もなくそれらの人たちが事務所に現れ、色々話を聞くことができた。結局分かったことは、多くの場合、ニームをコショウの支柱として利用しようとしたが、コショウとニームの根の競合問題、更にはニームの木の枝が光を遮ってコショウの成長に問題がきたされたりした。また、鳥がニームの木にやってくるようになり、その際、ヤドリギを持つてきて、それが作物についてしまうという問題が発生。結局多くの人がニームの支柱としての利用を断念した。しかし、ブラジルの政府の研究機関によると、根腐れ病がニームによって抑えられるという最近の研究結果もあるという。

そこで、中田先生からチャコの土地の特徴である塩気があり、粘土質の土地でも育ち、また鳥の被害にあわない実のなる商品作物はないかと尋ねてみたが、難題という感じであった。

カスターニヤ（栗の一種）という実を紹介された。マチエツテでも割れないぐらいに硬い実で、木は一〇メートル以上になり、八年目あたりから実をつけるらしいが、やはり一定程度の雨量が必要なのではないかということだった。また、小長野氏はアグロフォレストの重要性をひとしきり話された。

混植することによって、より自然の植生に近くなり、植物自体が補い合うことによってより病気が起こりにくくなる。また違った種類の落葉が様々な養分を含む自然の重要な肥料となり、地力を維持することが出来る。一時的生産は落ちても長く同じ土地で農業を続ける為には最良の栽培方法であることを強調された。また直根の重要性も話された。直根を如何にまっすぐ成長させていくか、それを疎かにすれば、数年経った木でも倒れることがあるという。実際に農業を数十年間必死になしてきた人たちの話は一つ一つ非常に重みがあり、参考になった。

その後、海谷会長はニームの本に書かれていた、ベレン北方八〇キロ行った所に一万本のニームを植えているという清水氏に連絡をしてくださり、ベレンで会えるように手配してくださった。そして、昼からはトメアスの歴史博物館、そして日本人学校などの施設、そして果汁工場見学のスケジュールを組んでくれ、次の日は午前中、実際の農園の見学の段取りをつけてくれた。

トメアスの歴史館は会長自ら写真を見ながら、説明してくださったが、アマゾンの過酷な気候風土との闘い、マラリア、デング熱などの病気との闘い、市場の遠さや、インフラが皆無の中での困窮生活との闘いなどで八割以上の人たちがこの地を去っていったという現実、初期の開拓者の生活は我々の想像をはるかに超えるものがあるように思った。果汁工場では斎木仁工場長が自ら工場の説明をしてくれ、様々の果汁を凍らせた形で市場に出していた。その中でもアサイという種類のヤシの実の果汁が人気のものであった。

この実はわれわれのところにあるカランダウというヤシの実に似てほとんど果肉が付いていない。現地の人がこの果肉を食べていたのに目をつけて商品化したらしい。アサイの実の中にワインの中に含まれている物と同様の血液を活性化させる成分が含まれているという。（続きは資料として別紙に）

今ソルゴが希望の光を放ち始めた！
ソルゴは当たり前だ！（中田所長談）

百ヘクタール（一km×一km）の一部でトウモロコシとソルゴの収穫がされました。トウモロコシは二三〇〇本、ソルゴは約一トンの結果を得ました。この開拓地は水が上があれば水没する地ですが、水が引けば肥沃な土地として姿を現します。従って農作物は六ヶ月間の戦いです。ソルゴもトウモロコシも昨年十周年記念行事の後の十月にトラクターで種まきがされました。四か月弱で収穫したわけです。その間、肥料も農薬も撒かず、草取りもしない、即ち放置して温かく見守って来たわけです。収穫後半はオウムとの競争でしたが、彼らがたらふく食べても食べきれない程時けば収穫は確実だという見通しです。収穫作業は背丈より高く伸びた作物と雑草で密集した畑での作業であることと、蚊の大量が攻撃してくるため、労働者も大変苦戦しました。機械で刈り取りが出来ればどんなに楽か、はかりしれません。とにかく、豚や牛が喜んで食べますので、草の少ない時期の非常食にもなりますし、肥させる時の飼料としても有効です。特に豚は沢山食べ成長も早いのですが、現在の四〇頭から百頭、二百頭へと増やしていく可能性を期待させます。今回の実験結果を良く検討して来季に備える予定です。



ソルゴの穂



トウモロコシ

第11回 ピースライフセミナーのご案内

開催日時 平成22年 3月27日(土)~28日(日)
プログラム

3月27日(土) 9:30 受付開始	10:00 開会
講義 南北米福地開発協会の基本理念	柴沼邦彦先生
講義 「パンタナール開発と保全」	高津啓洋先生
3月28日(日) 9:00 講義	柴沼邦彦先生
講話 南北米福地開発協会 創設者紹介	櫻井設雄先生
「南北米福地開発協会の活動紹介」	

17:00 閉会

開催場所 川崎市民プラザ2Fセミナールーム

住所 : 川崎市高津区新作1-19-1(駐車場有り)

参加費用 (A) 宿泊の場合 14,000円

(1日目の昼・夕食、2日目の朝・昼食付)

(B) 通いの場合 10,000円

(1日目の昼食・夕食、2日目の昼食付)

(C) 1日のみ参加の場合 5,000円

参加希望者は南北米福地開発協会までご連絡ください

地球家族として
自然を守りましょう

南北米福地開発
協会会員の募集

南米、パラグアイパンタール地域へのエコツアーならびに植林活動を通じて生態系の維持と強化を促進し、その地域をモデルとし、世界に環境保護の大切さを訴えています。会費は月五〇〇円、毎月、パンタール通信を送ります。また、各種のセミナー、エコツアー等の案内をいたします。

南北米福地開発協会 事務局

〒221-3100

神奈川県川崎市高津区

溝口二一十一十五

岩崎ビル4F

電話

〇四四一八二九一二八二二

Fax

八二九一二八二〇

会費納入

郵便口座

一〇一八

〇一七七六八〇四七一

代表 柴沼邦彦

E-MAIL

office@asd-nsa.jp

ホームページ

http://www.asd-nsa.jp